

クラーク室内管弦楽団 第25回演奏会

“19世紀初頭の鬼才と天才
クリスマスの競演”

2011年12月21日(水) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館講堂

入場無料

プログラム

N. パガニーニ (1782-1840)

バイオリン協奏曲第1番ニ長調 Op.6

L.v. ベートーベン (1770-1827)

交響曲第8番へ長調 Op.93

バイオリン独奏：磐淵真里子

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ：011-706-6595 (工学研究院・下川部雅英)

プログラム・ノート

18世紀から19世紀の西欧クラシック音楽の世界では、音楽家といえば演奏と作曲の両方をするのが一般的でした。演奏会に足を運ぶ人たちは、その音楽家の新作披露と同時に、演奏の腕前を楽しみにしていたわけです。そうしたなかで、19世紀には、いわゆる演奏の超絶技巧を売りものにする音楽家が現れてきます。中でも有名なのが、ピアノのリストとバイオリンのパガニーニでしょう。彼らの演奏会には、毎回多くのファンが押し寄せ、演奏会チケットにはプレミアムがついたといわれています。ただし、リストはその人生の後半で、単に表面的な技巧をひけらかすだけではない、音楽的な内容の充実した曲を作るようになっていきます。結果として、ピアノ曲だけではない名曲をいくつも残すこととなります。一方、パガニーニは、最後まで技巧を売り物にする音楽家であったようです。多くの逸話が残されています。

著作権などがまだきちんと確立していない時代、パガニーニは、自分の協奏曲のオーケストラパート譜を自分で管理し、リハーサル直前にオーケストラの楽員配布、終演後はただちに回収し、曲がよそに出回らないようにしていたようです。結果として、パガニーニの曲を聴きたければ、パガニーニの演奏会に行くしかない、という状況がうまれました。また、パガニーニのバイオリン演奏の技術が常人の想定をはるかに超えたものであったため、悪魔と契約した、などといううわさまで広がりました。実際に、そのようなうわさをパガニーニ自身が利用していたとも考えられます。手足が長くやせて長身の彼は、黒ずくめの衣装で演奏をし、観客の心をわしづかみにしていたようです。

今日用いられるいくつかのバイオリンの奏法でも、パガニーニが始めたと考えられるものも少なくありません。たとえば、左手でのピチカートや、G線だけで高い音まで引く奏法、また、バイオリンの調弦を通常とは違う音にするなどが挙げられます。本日演奏する**バイオリン協奏曲第1番**は「ニ長調」ですが、パガニーニの実際の演奏では、ソロバイオリンの音を引き立たせる為に、半音高く調律した楽器で演奏し、オーケストラパートは、半音高い変ホ長調で伴奏していたそうです。

ベートーベンの音楽には、聞き手に（演奏者にも）ある種の緊張感を与える仕掛けがたくさん施されています。「運命」や「英雄」など比べて、比較的「軽やか」なイメージがあるかもしれない**交響曲第8番**ですが、「急に強く」「急に弱く」の指示は頻繁に出てきます。また「急に強く」の前の部分に「ずっと弱いままで *sempre PP*」などという（ストイックな？）指示があり、急激な強弱の変化を引き立たせようという工夫がみられます。あるいは、故意に不安定な調の音を入れたり、拍の頭以外の部分に強いアクセントをつけたりなどなど。特に、1楽章と4楽章は、ゆったりとした気分長い間ひたらせてくれない音楽のつくりになっています。

貴族社会から革命を経て、市民社会へ、という何か活気のあるそして喧騒とした当時の社会の気分を反映しているのでしょうか。音楽を通して、何か人間の持つ「強い意志性」を表現しているような気がします。このようにしてベートーベンが自分の音楽に込めた強い思いが、今日でも世界中でその音楽が愛されている理由の一つかもしれません。

(奥 聡)